

中学生区分

佳作

香川県

高松市立木太中学校 三年
 足立 安優

ことば
 「言葉ではなく心で」
 こころ

私は、クラス替えで初めて身体障がいのある女の子と同じクラスになった。別のクラスだったときには、昼休みなどに友達と楽しそうに関わっている彼女を見かけることはあったが、彼女自身の苦労や周囲のサポートは何も見えていなかった。私は、ほんの一部の表面しか見ていなかったことに気づかされた。

クラス替え初日。出席番号順の座席だったが、私の前に彼女がいた。驚きを隠せなかった。どう接したらいいのだろうかと不安になった。担任の先生から、クラス全員に、彼女についてお話があった。「彼女は言葉を使えないから、タブレットを使って意思表示をするので知っておいてね。」と。その後、不安そうな顔の私は、別の先生から、「いろいろと戸惑うことがあると思うけど、よろしくね。」と声をかけられた。ますます不安が強くなり、プレッシャーを感じた。

そして、すぐに私は困ってしまった。彼女の思いを

うまくみ取れない。どうしよう。正確に言えば、彼女は私の言葉をおおむね理解してくれているのに、私が彼女の伝えたいことを理解するのが難しいのだ。会話がなかなか成立せず、どう接したらよいか、全くわからなかった。

そのような中、彼女が意思表示に使っているタブレットを目にすることになり、とても工夫されているタブレット画面に目を見張った。先生方の顔写真、体調を表すイラスト、定型文。最初に担任の先生がおっしゃった「タブレットを使って意思表示をする」という意味がよくわかった。そして、このタブレットを見て、私の不安も少し解消された。また、移動は車椅子で、常に先生方が寄り添っている。給食は、外部スタッフの方のサポートにより、教室で一緒に食べる。衝撃的だった。これまで様々な工夫をして生活してきた彼女の気持ちを考えると、とても胸が締め付けられた。

同時に、彼女の生きる力強さを感じた。

総合学習の班活動の際、彼女と一緒に修学旅行のホテルについて、パソコンで調べる機会があった。言葉を使つての会話はやはり難しかったが、タブレット以外にも、彼女は指を使ったり、うなずいたり、首を横に振ったりしながら意思表示をしてくれた。彼女と心と心で通じ合えたと実感できたことがうれしかった。

彼女はみんなと同じように行事にも参加している。沖縄への修学旅行では、二泊三日を共に過ごし、運動会やプールの授業にも参加した。サポートが大変なこともあるが、いつも前向きな彼女の姿を見て学ぶことも多い。彼女と一緒に沢山の思い出を作ることができてとても良かったと感じている。

中学生の私たちは、毎日が挑戦、そして成長の日々である。辛いことや嫌なこと、うまくいかないことは誰にでもある。彼女にだって沢山あるはずなのに、笑顔絶やさず、苦を全く感じさせない彼女は、私と比較にならないほどの強い心をもっている、素敵な十五歳だ。私は彼女を尊敬する。彼女と出会って、私の心は本当に成長できたと思う。

あと半年余りで私たちは中学校を卒業するが、心が通じ合えば会話ができるということを教えてくれたかけがえのない友と、残り少ない中学校生活を楽しく過

ごしたいと思う。

中学生区分

佳作

東京都

学習院女子中等科 三年
 あらまき 荒巻 さな 沙南

「他者を思いやる」

私は中学から電車通学を始めました。徒歩で通学していた小学校のときよりも登下校に時間がかかったり、行き交う人がかなり増えたりなど慣れないことが未だに多いです。特に平日の部活帰りの際は何十人も生徒と退勤する人達で改札や電車がとても混んでいて、エスカレーターに乗る列が長く伸びています。

ある日の部活帰り、いつも通りエスカレーターの列に並んでいると乗り口の端でおばあさんが立ち止まっていました。なぜずっと立ち止まってしまっているのか不思議に思った私は列を外れて近くへ行き、声をかけました。ゆっくりと振り向いたおばあさんの手には白杖が握られていて、その時に視覚障がいのある方だと気付きました。この駅は色々な病院が近くにあるため、怪我をしている方の案内などをされる警備員の方が常勤していらっしやいますが、その日は混雑している時間帯と重なりいらっしやいませんでした。頼れる

大人もいませんでしたが、このまま困っている方を放って帰るわけにはいかないので、私が知っている視覚障がいのある方のガイドの方法をできる限り実践してみました。そして、なんとかエスカレーターを降りることかでき丁度戻ってきた警備員の方とお会いし、ガイドを変えました。しかし、私なりに最善を尽くしたのですが、エスカレーターを降りる際おばあさんが立ち止まっている時よりも怯えていたり、私とおばあさんを見つけた瞬間に必死に駆け寄ってくる警備員の方の様子を見て、何かまずい対応をしてしまったのではないかと考え、家え帰って調べました。

その結果分かったことは「なるべく正面から声をかける」、「どのように手伝えれば良いか尋ねる」、「相手の半歩先に立ち、肘を握ってもらい、一緒に歩く」、「段差などがあるときは一旦立ち止まって状況を説明する」でした。

あの時の自分のガイドの仕方を振り返ってみました。この四つのうち一つもできていませんでした。特に三つ目と四つ目は私がおばあさんの前腕に手を添えて、横に並んでしまっていたり、声かけはしていたものの、立ち止まっていなかったりなど、とても危ないガイドだったと反省しています。そして無茶なガイドで恐怖心を抱かせてしまったおばあさんにとっても申し訳ない気持ちでいっぱいです。

この日以来同じことは繰り返したくないと思い、障がいのある方が困っていた時のサポートの仕方を調べて学びました。また、調べているうちにヘルプマークの重要性を知り、公共交通機関などではヘルプマークを付けている方に席を譲るなど思いやりのある行動を心がけていきたいと思っています。

中学生区分

佳作

群馬県

おた ひがし
太田市立東中学校 一年
市川 いろは

せ か い い ち だ い き ら
世界一大嫌いで宇宙一大好き

「なんてかわいいんだらう。」

弟に始めてあったとき、すぐにそう感じた。これから姉になるワクワクと期待で胸がいっぱいだった。

ずっと大好きでいられる。そう思っていた。

弟がうまれてから数年、だんだん私の弟とまわりの子たちとの違いに気づきはじめた。

なにかが違う。なにが違うの？そんな疑問に苛立ちを覚えた。

何日経ってもその思いが変わることはなかった。逆に悪化していくだけ。最初はあんなに大好きだったのに、今では大嫌いになっていた。

普通じゃないから。みんなと少し違っていているから。理由はたったそれだった。

口をきく回数、いっしょに遊ぶ回数などは、だんだん減っていくだけだった。いっしか私の中にあった弟への「大嫌い」は「無関心」へと変わりつつあった。

でも、その両親の行動は私の中のモヤモヤを大きくしていった。

考えて、考えて、考えつづけてみた結果、私が弟のためにできることを一つみつけることができた。それは、「普通に接する」ということだ。ただ、普通に話して、普通に遊んで、普通に関わる。これが私が弟のためにできる行動だと気づいた。

弟が、自分に少し発達特性があると知ってまわりに人一倍迷惑をかけていると思いこんで、自分のことが嫌いになっても、私がただ「私の弟」として接すること、少しでも、少しでもいいから「みんなと同じ」という気持ちを感じていてほしいと思ったからだ。

弟への関わり方を改めてから、私は弟のことがだんだん好きへともどっていった。同じゲームをして盛り上がっているとき、弟がとつぜんボケて、それに対して私がツツコンで二人で笑っているとき、ケンカをしても、気づいたら仲直りしているとき、こんなことが続いた、私の弟がこいつでよかったとしみじみと感じている。

私は今の弟が大好きだ。

この経験を通して私は、相手の立場になって考えることの大切さ、相手と自分の感じ方の違いなど、様々なことを学ぶことができた。この学びは弟がいたから

そんな日が続いていたある日、母から弟は発達障害が少しあることを知らされた。

おどろいた。とても。発達特性というものについても、弟がそれを少しもっているということについても。

ひとまず自分の頭の中を整理しようと思って、発達特性について調べてみようとした。

でも、調べたあとの自分がどう思うか想像できなくてやめた。

勇気をだして母に聞いてみた。母がいうには、「発達障害ではないが、特性はある人」のことをさすらしい。

私はどうしたらいいのかわからなかった。なにか特別な対応をしたほうがいいのか、それとも今のままでもいいのか。

父と母は弟のためにできることを一生懸命に頑張つてやっていた。それは親なのだから当たり前と思う。

こそ得ることができた。弟には感謝しかない。

今でも弟とはよく話すし、いっしょにゲームをしたりもする。弟が何かできるようになったら自分のことのように喜べる。でも、ケンカをしたら、お互い会話なんて絶対しないし、目も合わせない。だから、私は弟のことが世界一大嫌いで宇宙一大好きだ。

中学生区分

佳作

仙台市

宮城教育大学附属中学校 一年

伊藤 菜那子

広がる弟の世界

「ななちゃん。〇〇どこにあるの？」

こう聞かれるのが私の日常。なぜなら、弟は視覚障害者で視野が狭く視力も悪いから。何かを探すのがとても大変で、苦手だからだ。

弟は私が三歳の時に生まれた。生後三か月の時に目が見えていないかもしれないと母が気付き、生後半年ほどで先天性の視覚障害であることがわかった。両親が弟に赤いおもちゃを見せて、目で追っているかを確認している光景を私は今でも覚えている。弟はまだ赤ちゃんだったので障害の程度もはっきりせず、両親は途方に暮れていた。だいぶ後になって母から聞いた話だが、当時はいろいろな人が心配してくれて、身近な障害のある人が自分なりに挑戦をしながら頑張っている話を紹介してくれたそうだ。周りの人からそのような話を聞きながら、私たち家族は祖父母も含め全員で「この子を普通に育てていこう」と心に決めた。

弟が挑戦するとき、先生方は「できるよ。できるよ。」という言葉で弟の背中を後押ししてくれた。弟は少しずつ自信が持てるようになり、自分でできることも増えていった。姉の私から見てもすごい変化だった。

そこから弟は学校、習い事、放課後デイサービス等でたくさんの人との出会い、関わり成長していった。そこで出会った人たちは誰もが弟の障害を自然に受け入れ、弟が困っているときには手を貸し、弟が挑戦するチャンスを作ってくれた。弟の合唱のコンサートを見に行った時、私が家で行っているサポートを周りの人たちが当たり前のようにやってくれているのを目の当たりにした。ステージの上で、自分を理解してくれる仲間に囲まれて、弟はとても楽しそうだった。

自分に自信を持つことができれば、障害があってもなくても輝ける。自分の世界を広げていける。弟の姿を見ていると心からそう思う。弟も、できないことに何度も挑戦して、できるようになる喜びや楽しさをたくさん経験した。そして、その経験を支えてくれたのは弟の障害に偏見を持たず自然に接してくれる人たちである。家族ではなくても、仲間の一員として弟を認めてくれる人たちに支えられて、弟は今輝いている。

現在、障害のある子どものために放課後デイサービスや特別支援級といった環境づくりが進められてい

我が家は両親ともに仕事をしていたため、弟を生後七か月から保育園に預けることにした。ここから、障害のある弟は家族以外の人とも関わるようになった。保育園の先生方にとっても弟のような視覚障害者を預かるのは初めてのことである。戸惑いや不安がたくさんあったと思う。その頃の弟は、目が見えないこと自分から何かをしようとする気持ちをなくしていた。いつも誰かに頼って、自分の思い通りにいかないことがあると泣いていた。「自分にはできない」と言われるとうしろもなくて、私が代わりにやってあげたこともあった。

しかし、そんな弟は保育園で日々を過ごす中で変わっていった。両親はあらかじめ先生方へ「全部みんなと同じようにできなくてもいいです」と伝えていた。しかし先生は「みんなと同じようにできますよ」と言っていて、何でも他の子たちと同じようにやらせてくれた。

る。しかし、そういう場所に関わる人も関わらない人も同じように個々の障害や個性を受け入れ、明るく前向きに生活できる社会になってほしいと思う。弟と周りの人のようなあたたかい関係が日本中に、そして世界中に広がってほしい。

私はこれからもいろいろな障害がある人を少しでも理解しながら、弟と、家族と、みんなで一緒に生きていこうと思う。弟を含めた一人一人がお互いを尊重して、前向きに生活できる未来へ向かって。

中学生区分

佳作

鹿児島県

音のない世界^{おとせかい}

鹿児島市立紫原中学校 一年
 おおやま りょうたろう
 大山 凌太郎

音のない世界はどんなのだろう。私は年に一度山口に住む祖父母に会いに行く。そして会う度に思う。祖父母の音のない世界はどんなのだろう。

私は当たり前のように音のある世界で生きていて、両親や友達との会話を楽しんだり、声の高い低いで相手の喜怒哀楽を判断する。大好きな音楽を聞いて歌ったり踊ったりする。しかしそれは祖父母にはできない。音のない世界の楽しみとは何だろう。

母に音のない世界は自分でつくることができるのか聞いてみた。すると母が驚き、

「私も小さい時同じことを思ったことがあるよ。じーじとばーばの世界でしょ。不思議に思うところが親子で一緒だなんて面白いね。」

と言った。そして教えてくれた。母は幼い頃お風呂に入る時にお湯の中に潜り、音のない世界を体感したらしい。さっそく私も試してみたが、両耳の圧迫感があ

り最初は恐怖を感じた。でも何度か繰り返すと、静かな音のない時間が流れる。だがもちろん息を止めているため長くは続かないが音のない世界を体感出来た。そしてやっぱり少し怖いと感じ、楽しくないと思った。でも、祖父母を見ているといつも笑っている。テレビを見て涙を流しながら笑うこともある。手話で母や友達とたくさん話し、とても楽しそうに過ごしている。それを見てみると表情がとても豊かで、手話のスピードに強弱をつけたりしているように感じた。手話ができない私にも、祖母はたくさん話しかけてくれる。正直、何を言っているのか母に聞かないとわからないが、祖母は何度も私に話しかけ楽しそうに過ごしている。私もそんな祖母との時間がとても楽しく感じた。祖母と数日一緒に過ごす中で音のない世界の楽しみは、人とのコミュニケーションなのかもしれないと思った。祖父母のように聴覚に障害がある人にとって人と

のコミュニケーションの手段は手話である。手話とは、音声ではなく手指や体の動き、表情などで自分の感情を表現する、手で話し、目で聞く言語と言われているとある。表情も一緒になることで感情を表現する、祖母を見ているとまさにそうだと思った。祖父母は毎晩NHKの手話ニュースを見る。そこでニュースを伝える人も表情豊かだ。母も祖父母と会話をする時はわざわざ着けているマスクを外して話す。それだけ表情が大切なのだ。

今回の帰省で母からたくさんの手話を教えてもらい祖母とゆっくり会話をした。会話中に手話を間違えると、こうだよと正しい手話を教えてくれる。間違っても大丈夫と笑顔で言ってくれる。何故間違いがわかるのか母に聞いてもらうと表情で言いたいことがわかると言っていた。そして母は私がたくさん祖父母に話しかけることは祖父母にとってとてもうれしいことだと教えてくれた。手話がわからなくても表情で思いが伝わると感じた。

音のない世界は静かで怖いという体感だったが、その世界の中で祖父母は生きている。やっぱりまだ生活をするには大変そうだと思ってしまうが、祖父母を見ていると楽しそうに生活している。もし人とのコミュニケーションが楽しみとなるのであれば、いつかおも

いっきり祖父母との会話を楽しみたい。今年も私が帰ってくるから何を話そうかなと楽しみに待っていてもらいたい。

小学生の頃から思っていた疑問を今回作文にすることで私なりの答えが出たように思う。音のない世界での楽しみ、それは、人とのコミュニケーション。私はいつか祖父母と一緒に声を出して笑える日が来るようにこれから手話を学んでいきたい。